

# 獄死、「眠るがごとく」

## 感奮、奮起そして焦燥

明治40年（1907）10月31日、伊庭想太郎は小笠原監獄内で胃癌のため死去した。収監5年にして、享年56歳。

半年ほど病床にあった想太郎は、気分のいいときは読書を好み、その最期は「すやすや眠るがごとく」だったと、当時の新聞は伝えている。前年には妻貞子が心臓病で亡くなっていた。「伊庭家断絶」という想太郎の遺言はあったが、残された家族は周囲が温かく見守ってくれたのではないかと。

事件当時14歳だった養子の長男孝にも、想太郎の恩師中根淑、「文友館」の弟子小笠原長生らの支援があったのだろう。同志社を中退後、音楽の道に進み、音楽評論家・演出家として名を成している。



(上) 貞源寺境内の想太郎と貞子の夫婦墓  
(下) 伊庭家代々の墓前で心形刀流の演武。平成10年初夏の八郎忌（朝涼忌）で。



孝は後年、父想太郎について「多くの人が想像しているような国粹主義の人間ではなく、一面では文化主義の人間でもあった」と、小笠原著『伊庭の兄弟』の中で述懐している。軍人志望だった孝に、軍人以外で身を立てるようにと、とりわけ外国語の勉強を勧めたという。

想太郎の性格については、中根も「着実な質で、物事を熟考する」タイプだったと記している。

とすると、あの凶行は、あまりにも唐突に映る。裁判では必ずしも明らかにはならなかった、想太郎の心の奥に何があったのか。

孝は「自己清算のためだったではないか」と、注目すべき証言を残している。それによれば、事件の2年ほど前から、想太郎の体力、意気が衰えてきたように見えた。「文友館」の塾風も弛緩した。澁刺たる自分を取り戻したいという「感奮、奮起、焦燥」が事件に向かわせたというのだ。

## 亡き兄を思慕、滅びの美学

裁判の予審で、想太郎は自らを「世に後レタル人間」と述べている。焦燥には、欧化主義の時代世相に疎外感もあっただろう。居宅の書斎に兄八郎の肖像を掲げていたことでわかるように、兄に対する思慕の念も強かった。

武士道を軽んじる町人出の剛腹な政治家を前にして、兄だったらどう立ち向かうか。それが想太郎の行動規範になって、思い切った手段を促したように思う。兄と共有した心情、それは、武士の時代に殉じる「滅びの美学」だったのではないかと。

「いまに見ておれ。兄に恥じない弟だということをお知らせしてやるぞ。世のため、人のため——武士道のため、壮絶な死にようを見せてやるぞ」。星刺殺事件を題材にした山田風太郎の小説『暗黒星』は、想太郎にそう独白させている。小説家の想像が案外、真実に近いのかもしれない。

伊庭家の菩提寺は、かつて浅草松葉町にあった名利貞源寺である。関東大震災などで、現在、中野区沼袋に移っている同寺境内に、代々の墓が10基並んでいる。向かって右端、兄八郎の墓の隣に、想太郎のそれがある。愛妻貞子との夫婦墓で、永い眠りに就いている。